

主 題：不公平に勝る確かな希望

聖書箇所：詩篇 10篇

テーマ：どんなに理不尽で悪がはびこっている状況にあっても希望を見いだして歩む

今朝私たちが学びたい箇所は「詩篇10篇」です。

- 10:1 【主】よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか。苦しみのときに、なぜ、身を隠されるのですか。
10:2 悪者は高ぶって、悩む人に追い迫ります。彼らが、おのれの設けたたくらみにみずから捕らえられますように。
10:3 悪者はおのれの心の欲望を誇り、貪欲な者は、【主】をのろい、また、侮る。
10:4 悪者は高慢を顔に表して、神を尋ね求めない。その思いは「神はいない」の一言に尽きる。
10:5 彼の道はいつも栄え、あなたのさばきは高く、彼の目に、入らない。敵という敵を、彼は吹き飛ばす。
10:6 彼は心の中で言う。「私はゆるぐことがなく、代々にわたって、わざわざに会わない。」
10:7 彼の口は、のろいと欺きとしいたげに満ち、彼の舌の裏には害毒と悪意がある。
10:8 彼は村はずれの待ち伏せ場にすわり、隠れた所で、罪のない人を殺す。彼の目は不幸な人をねらっている。
10:9 彼は茂みの中の獅子のように隠れ場で待ち伏せている。彼は悩む人を捕らえようと待ち伏せる。悩む人を、その網にかけて捕らえてしまう。
10:10 不幸な人は、強い者によって碎かれ、うずくまり、倒れる。
10:11 彼は心の中で言う。「神は忘れている。顔を隠している。彼は決して見はしないのだ。」
10:12 【主】よ。立ち上がってください。神よ。御手を上げてください。どうか、貧しい者を、忘れないでください。
10:13 なぜ、悪者は、神を侮るのでしょうか。彼は心の中で、あなたは追い求めないと言っています。
10:14 あなたは、見ておられました。害毒と苦痛を。彼らを御手の中に収めるためにじっと見つめておられました。不幸な人は、あなたに身をゆだねます。あなたはみなしごを助ける方でした。
10:15 悪者と、よこしまな者の腕を折り、その悪を捜し求めて一つも残らぬようにしてください。
10:16 【主】は世々限りなく王である。国々は、主の地から滅びうせた。
10:17 【主】よ。あなたは貧しい者の願いを聞いてくださいました。あなたは彼らの心を強くしてくださいます。耳を傾けて、
10:18 みなしごと、しいたげられた者をかばってくださいます。地から生まれた人間がもはや、脅かすことができないように。

どうしてこんな理不尽なことが起きているのだろう？なぜ、私だけがこんな酷い目に遭わなければいけないのだろう？と、このような疑問を私たちはこれまでに一度は抱いたことがあるのではないのでしょうか？どうしてこんなことが許されるのだろう？正しい者が虐げられ悪者が成功を収めているなどあってはならないはずだと。しかし、私たちがこの世界を見渡してみると、悲しいことに、そのような不公平や悪が横行していることはだれも目にも明らかです。テレビやネットを見ると心を痛めるニュースが毎日のように私たちの許に流れて来ます。恨みや憎しみに駆られた人たちが各地で暴動を起こし、争いを引き起こしていたり、無差別に振舞われる暴力によって目を覆いたくなるような悲惨な事件が起こっていたりします。

明らかに正しくないこと、「絶対にそれはおかしい」というそんな不正や間違いがまかり通ってしまうこともあります。私たちが目にすれば、怒りや落胆、悲しみを覚えるような苦しみや痛みが世界中には溢れています。また、このような出来事は私たちから遠く離れたところで起こることではありません。私たちもよく知っているように、私たちの日々の生活においても私たちの身に「どうして？なぜ？」と疑問を問いたくなるようなことはよく起こるのです。私たちはときに、自分自身は一切間違いや失敗を犯していないにも関わらず、そのような扱いを受けることがあります。

たとえば、友人との間で有りもしないことで疑われ、その結果、陰口を言われたり冷たく扱われたりすることがあるかもしれません。単に気に入らない、自分とは合わないといった理由で嫌がらせや仲間外れにされることがあるかもしれません。職場では他の人の失敗の責任を押し付けられたり、自分のやった成果が正しく認められず上司から一方的に責められることがあるかもしれません。計画をしっかり立ててうまく行くと思っていたことが、他の人の自分勝手な行動によって台無しにされてしまうこともあるかもしれません。何より、クリスチャンとして忠実に生きていこうとすれば、周りの人に自分の信仰を笑われたり「変わった者」として馬鹿にされ拒絶されたことが、皆さんはこれまでに経験されたこ

とがあるかもしれません。

またある時は、自分自身は深く傷つき失意の中をさまよっているにも関わらず、自分を傷つけて踏み にじった相手は何の問題もなく快適に過ごしている姿を見ることもあります。例を挙げればきりが ないのですが、私たちはこうして正しいことが否定され誤っていることが肯定されるという、私たちの頭で は理解できないような出来事、自分の力ではもうどうにもできないような場面に追いやられることがあ ります。そして、そのような中に置かれる時こんな思いが起こって来ます。「今自分の身に起こってい ることは絶対におかしい。でも、自分にはこの状況をどうすることもできない。どうして私だけがこん な酷い目に遭わなければいけないのだろう？」と。

皆さんどうでしょう？過去の自分自身を振り返って何か思い当たることはないでしょうか？また、も しかすると今まさにそのような苦しみの中に置かれ、心の中に様々な思い悩みや悲しみを抱いている方 がおられるかもしれません。「どう考えてもおかしい。何とかこの状況を変えたい。だけど今の自分 にはどうすることもできない。」と。皆さん、少し考えてみてください。このような状況は私たちの周り には溢れているのですが、そこに自分が置かれたとき、皆さんはどのように振舞っているのでしょうか？ どのようにその状況を捉え応答しているのでしょうか？自分の周りに起こっているそのような受け入れ難 い不公平さ、それらに心を乱され痛みや悲しみ怒りに自分自身が支配されてしまっていないですか？

もちろん、先が見えないそのような暗やみに置かれるなら、私たちは大きな悲しみ大きな難しさを覚 えるのですが、その中でも主を見上げて希望を見出しながら歩いていこうとしておられるのでしょうか？ それとも、こんな状況では希望など見出すことは出来ない、希望を持つことはできないと諦め、ただそ の苦しみの時間が過ぎ去っていくことを待っているだけでしょうか？私たちは悪が勝ち誇る姿をただ見 守り、失意の中で何もすることができないのでしょうか？

感謝なことに、今日、私たちが見ようとしている詩篇 10 篇は、そのような難しさを経験する弱い私 たちに大切なことを教えてくれています。それはシンプルに次のことです。「たとえ、どんなに理不尽 で悪がはびこっている状況に置かれたとしても、主を知っている者は何にも勝る確かな希望を持つこ とができる。」、これが詩篇 10 篇が私たちに教えているメッセージです。みことばははっきりと私たち に、たとえ、私たちの目に不公平に思えるような苦痛を味わうことがあったとしても、そんな中でもあ なたがたは希望をもっていくことができると、そのようにダビデは教えています。

では、いったいどうすればその希望を見いだすことができるのでしょうか？今日はそのことをごいっ しょにみことばを通して学んでいきたいと思います。今日見るこの詩篇 10 篇がどのような歴史的背景 の許に記されたのか、その詳細はだれにも分かっていません。ここには今まで見たようなタイトルがあ りません。「ダビデの賛歌」というタイトルを見ましたが、ここにはそのようなものはありません。し かし、前回に触れたように、9 篇と 10 篇は元々一つのものであったという考えから、この 10 篇はダ ビデの作品であると多くの人は考えています。そして、これら二つの詩篇で使われていることばや使い 回しなどを見ると、確かに、著者がダビデであるというのは正しいと思われます。ダビデによって 9 篇と 10 篇は記されたのです。

これを記したときのダビデは不当な扱いを受け苦しめられていました。でも、その中にあって希望を 見出しながら歩むことができたのです。ですから、その彼の姿から学んでいきたいと思います。特に、 彼が悪がはびこる中で希望を見出すために行った二つの正しい応答を見ていきたいと思います。有りも しないことで虐げられ、悪が勝利したかのように感じるそんなときでも、希望を持つために必要な二つ の正しい応答です。このみことばが今後皆さんが難しさを経験するときの励まし慰めとなること、また、 その中にあっても忠実に歩み続けるための力となることを心から祈っています。

☆希望を見出すための二つの正しい応答

1. 主に自分の思い悩みを告白すること 1-11 節

1 節「【主】よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか。苦しみのときに、なぜ、身を隠されるのです か。」、ダビデは自分が抱えていた疑問、悩み、悲しみや戸惑いというすべての思いを素直に主に打ち明 けています。ここで皆さんに注目していただきたいことばが二つあります。

・【主】よ。： このことばはこれまで何度も見て来ましたが、ダビデは自分の神がどれ程力のある 方か、同時に、この神が自分と個人的な関係のある契約の神であることをよく分かっていました。自分 の【主】がヤハウェであること、いつまでも変わることのない全知全能の神であること、そのような 偉大な神であることをよく覚えていました。また、前回の 9 篇の内容を思い出していただくなら、苦し みの中にいた彼は主が必ず悪に報いてくださる義の審判者であることを覚え、その主への信頼を口にし ていました。主は間違っていることを決してそのままにして置かれぬお方であると知っていたからこ そ、彼はどんなに深い悲しみを味わうことがあっても、敵に攻められてどれほどぼろぼろになるまで弱 り切っていても、主の正しい報いを期待し信頼していたのです。主は絶対に虐げられた者をあわれみで

守ってくださる、悩む者を決して見捨てることはない、弱った者をいつも心に留めていてくださると、彼はこのように確信していたからこそ、自分のいのちを脅かすような苦難の中にあっても変わらずに主に誉め歌を歌っていたのです。

そのように苦しみの中で主を覚えることを知っていたダビデがこの10篇の初めにこう歌うのです。

「【主】よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか。」と。ダビデは自分の置かれている状況を理解できていませんでした。義の審判者であり必ず悪に報いてくださると約束されていた主がいるのも関わらず、彼が周りを見渡したとき、そこには好き勝手に生きていて、自分の望むままを行い「神などいない！」と驕り高ぶっていた悪者たちで溢れ返っていたのです。彼らは悪意のあることばで弱い者を傷つけ、自分の思いのままに人々を苦しめた挙句、それに対する罰を受けることもなく逆に成功を収めているのです。それを見てダビデは「主よ、いったいどうしてですか？あなたは悪者を滅ばされるお方だ、正しく報いられるお方だと、そう約束して下さったではありませんか？」と、彼はまるで主が自分のことを見捨ててしまったかのように、自分の経験している苦痛を顧みてくださらないかのように感じて嘆いていたのです。

・「なぜ、」：「なぜ、身を隠されるのですか。」と口にしていました。この「身を隠す」とは文字通り「～を隠す、秘密にする」という意味もありますが、それ以上に、感情的な要素を含んで「無視をする」という意味で用いられることがあります。要する、ここでダビデが抱えていた問題は、単純に、自分の置かれている状況が苦しいというだけでなく、自分が愛し信頼している主が守ってくださらないこと、主があたかも意図的に自分のことを無視しているかのように悪者の手から救い出してくださらないこと、主に対してそのような疑問を覚えていたのです。このような状況を彼は嘆いていたのです。

これらのことを見て、私たちも同じような経験をしたことはないでしょうか？私は神がすべてのことを支配されている主権者であることを知っている、私は神がいつもあわれみを示してくださるお方であることも分かっている、でも、今この苦痛の中でまるで主に見捨てられてしまったかのように感じる、どうして私の叫びに答えてくださらないのだろうか？と。人から裏切られたり酷い扱いを受けたり、有りもしないことで責められたりすることなどは私たちの日々の生活の様々なところで経験します。

そのような中で主が自分の悲しみの声を聞いてくださらないように感じる時、主が自分から遠く離れてしまったかのように、身を隠されているように感じる時、皆さんはどのように振舞っているのでしょうか？なぜ、主はこの状況を改善してくださらないのだろうか？と、主に対して怒りを覚えていないでしょうか？一向に変わらない苦しい状況を見たときに、主に対して苦い思いを抱いて不平や不満、失望を口にしていないでしょうか？「どうして神はこの状況を変えてくださらないのだろうか？どうして私をあわれんでくださらないのだろうか？そんな神ならもう信頼することはできない！」と諦めてしまっていないでしょうか？

また、苦しみを味わっているとき、私たちはときに自分が味わっている苦しみが何でもないかのように無理やり自分に言い聞かせて、心では悲しみ悩みを抱えているにも関わらず、人前では笑顔を浮かべて何でもないかのように振舞っていたりしないでしょうか？皆さん、もし、そのような悲しみ痛みを覚えている方がおられるなら、このみことばが私たちに教えてくれていること、それは「ダビデのように私たちも自分の思い悩みを主に告白することができる」ということです。

私たちが主に自分の弱さを口にすること、悲しみや思い悩み、痛みや苦しみを打ち明けることは間違っていることはありません。それは信仰が弱いということを表しているものでもありません。私たちはどんなときにもどんな思いであってもそれらを主の前に持って行って主に信頼することができるのです。このような特権を私たちは持っているのです。但し、これは自分の怒りをただぶちまけて「主は自分に対して何もしてくれない」と主を一方向的に責めることはありません。

また、私たちの心の中にある疑問を主に知っていただくこと、それは私たちに与えられた特権ですが、それに対して主が答えてくださるかどうかわかりませんが、それは私たちが決めることではなく、主がお決めになることです。ですから、もし主が自分が望むタイミングで祈りに答えてくださらないとしても、私たちは不平不満を言うのではなく「この方は私のことをいつもあわれんでくださるお方だ」と、主に信頼していかなければいけないのです。そのように私たちは歩んでいけるのです。私たちが自分の弱さを認めて主の前にへりくだって、自分の抱えている不安や恐れ痛みなど、自分の経験している状況のすべてを素直に打ち明けて信頼するのであれば、私たちの主はそれらを必ず心に留めてくださるお方です。

Ⅰペテロ5：6-7にこのように書かれています。「6 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくさるためです。7 あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくさるからです。」、自分のことを心配してくさるすばらしい主に向かって、その主の前にへりくだって、思い煩いのいっさいをゆだねること、まさに、これこそがここでダビデがしていたことでした。自分のすべてを主にゆだねよう…と。

さて、彼は続けて、彼自身が抱えていた不公平に対する葛藤、悪に対する悩みについて、その詳細を2-11節で主に正直に打ち明けています。ダビデはここで彼に苦しみをもたらした人々を悩ませていた悪者がどのような存在なのか、どのような悪が行われていたのか、その特徴を三つ挙げています。

○人々を悩ませていた悪者の三つの特徴 2-11節

1) プライド 2-6節

2節に「悪者は高ぶって、悩む人に追い迫ります。」とあります。続く3節には「悪者はおのれの心の欲望を誇り、」、4節には「悪者は高慢を顔に表して、」と、繰り返してこの人物が自分のことを誇り高ぶっている様子が記されています。この人物は自分の心の欲望を誇っていると書かれています。この悪者は自分の心が欲することを何よりも望み、そして、それを手に入れたなら、それを手にすることができた自分のすばらしさ、知恵や力を自慢していたのです。「みんな見てください。私はこんなにも優れているから賢いからこんな地位や名誉、称賛を受けることができたのです。」と、彼の頭にあったことは「どうすれば益々自分が人に認められるか、人々の間でよく思われるか、」ということだけでした。いつもこの人物の中心は「自分」だったのです。そして、こうしてプライドが大きく膨れ上がった結果どうなったのか？6節を見てください。「彼は心の中で言う。『私はゆるぐことがなく、代々にわたって、わざわざに会わない。』と、誇り高ぶっていた悪者は心の中でこのようにつぶやくのです。『私は力も富も思いのままを手にしすべてのことが上手くいっている。この私にだれ一人として邪魔することなどできない。たとえ神でさえも自分の成功を揺るがすことも自分に干渉することさえできない。私の身にはこの先も決して悪いことなど起こるはずがない。』と、悪者はこうして己のプライドゆえに神を誉め称えるのではなく「神などいないのだ」とののしっていたのです。

2) 強欲 3節

3節「悪者はおのれの心の欲望を誇り、貪欲な者は、【主】をのろい、また、侮る。」と、悪者は単にプライドに満ちあふれて自分の手に入れたものを誇りとするだけではなかった。彼は今あるものを手に入れただけでは満足できず、まだ足りないもっともっと欲しいと願っていました。富をもっと手に入れたい、力を美しさを優れた知識を世の評価を、そして、もっと多くのものを手にすることによって、そのことが可能であれば益々周りの人が自分のことを良く扱ってくれる、自分のことを称賛してくれると、いつも自分中心の思いがその人の心のうちを支配していたのです。こうして強欲な者の心は自分の利益を得ることにいつも向けられ、与えられているものを主に感謝するのではなく主を忌み嫌うものでした。ダビデはプライドに溢れた者が存在していること、そして、強欲な者が存在していることを見た時に疑問を抱くのですが、それ以上に、ダビデにとって受け入れ難いことは、こんなに自分勝手に自分のことだけを考えてプライドに溢れているような者、自分の望むものだけを覚えて行動している者の道がいつも繁栄し栄えていたことでした。5節の初めに「彼の道はいつも栄え、」とあります。自分勝手に思うがままに生きている人たちが何をしても上手くいって、自分の思い通りに物事を進めていることを見た時に、そして、その一方でその人々の欲によって正しい者、弱い者たちが虐げられている様子を見た時に、ダビデはこのように叫ぶのです。「主よ、いったいなぜですか？どうして正しい者が虐げられ、プライドに溢れて自分の欲望に従っている者が成功しているのですか？どうして主はこれを良しとされているのですか？」と。皆さん、ダビデのこの気持ちは私たちにも分かりますね。

3) 悪意に満ちた言動 7-11節

ここまで見て来て、皆さんも容易に想像できると思います。心のうちにプライドを抱えていて人を見下すような高慢な思いを持って、自分の欲求を満足させるためであれば何でもする、そんな心を持っている人がいたとするなら、その人物から自然と出て来るもの、内側から出て来る悪意というものは外側へと繋がっていくわけです。心の中にプライドを持っている者、強欲な悪者たちは心が汚れているゆえに、実際に人を傷つけるようなことばや行動を取るとダビデは記しています。7節に「彼の口は、のろいと欺きとしいたげに満ち、彼の舌の裏には害毒と悪意がある。」と書かれています。

皆さん考えてみてください。いつも自分が称賛されることを望んで自分の利益を求めている者、その者が発することばはどんなものでしょう？いつも自分が中心な者が発することばはどのようなものでしょうか？恐らく、多くの場合、他の人を使うことばよりも自分を優先することばではないでしょうか？その人が自分は傷つきたくないと考えているなら、相手を受け入れるようなことばを発するのではなく、自分を正当化し、さらに人を傷つけるような暴言を発してしまうようなことがあるのです。自分が何よりも大切だとし、自分しか見ていないそのような者は配慮に欠けた悪意に満ちたことばを発すると言います。私たちはそのような自分中心で自分のことだけを考えて他の人の徳を高めない、そのようなことばを発してはいないでしょうか？

また、特にここで「彼の舌の裏には害毒と悪意がある。」と記されています。これは言い換えるなら、悪者は口からことばを発するその前から、ことばが舌の裏にあるその時からそれは悪意に染まったもので

あるということです。ある人のことばは丁寧で聞くとこは優しいものであっても、実は、その人の本心は別の所にあつて、悪いことを企んでいて、人を欺くようなことばを發することもあつたのです。そのことが分り易く記されています。詩篇 28 : 3「どうか、悪者どもや不法を行ふ者どもといひしよに、私をかたづけなさい。彼らは隣人と平和を語りながら、その心には悪があるのです。」と。悪者の悪意あることば、自己本位のことば、それは人を傷つけ苦しめる力をもっているとダビデは教えています。

また、悪者はことばだけが悪意に満ちあふれていたのではありません。その行動までもが人に害を与えるものだったのです。8-10節を見てください。「8 彼は村はずれの待ち伏せ場にすわり、隠れた所で、罪のない人を殺す。彼の目は不幸な人をねらっている。9 彼は茂みの中の獅子のように隠れ場で待ち伏せている。彼は悩む人を捕らえようと待ち伏せる。悩む人を、その網にかけて捕らえてしまう。10 不幸な人は、強い者によって碎かれ、うずくまり、倒れる。」、どんなものよりも自分の利益を求める者、自分の欲するものを手に入れるためにはどんなことでもする者、その者は弱い者を平気で踏みつけるのです。まるで村外れの待ち伏せ場で待機している山賊のように、茂みの中で隠れている獅子のように、網を仕掛けて待ち伏せをしている狩人のように、悪者は今か今かと誠実に歩んでいる無力で弱い者を捕えようと罠を仕掛けています。そして悲しいことに、力無い者はこれに抵抗することもできずに、それらの行動によって傷つき弱り果ててしまうのです。「うずくまり、倒れる。」と書かれています。

そのような現状を見た最後に、その悪者がつぶやいていることが 11 節に記されています。「彼は心の中で言う。「神は忘れている。顔を隠している。彼は決して見はしないのだ。」と。これまでに見て来たように、悪者はいつも自分の欲を満たそう自分の願いを叶えようとして生きています。そこには何の問題もないと思っています。自分のために生きていくこと自分の望むままに生きていくことに対してそれが悪いことだとは思っていないのです。そのような人物はだれ一人として、自分勝手に生きているその自分たちの上に神のさばきが迫っているとは微塵も考えていないのです。

では、なぜ彼らは自分の身にさばきが迫っていると考えていないのでしょうか？おもしろいことに、それは彼らが神を知らないからではありません。このように書かれています。「神は忘れている。顔を隠している。彼は決して見はしないのだ。」と。彼らは神がいることを知っているのです。しかし、神の存在を知っていながら、その神に対して何の関心も払うことがないのです。自分たちは自分勝手に生きて他の人を踏みにじったとしても問題ない。なぜなら、神は隠れているから。神に喜ばれる生き方をしなくても大丈夫だ、どれだけ驕り高ぶって自分のために生きたとしても何ら問題ではない、神は自分のことなんて忘れておられるから。今のまま、自分中心の生き方をしても大丈夫だ、なぜなら、神は私のことなど見ておられない。だから、私たちは何をしても問題ないと言うのです。

皆さん、自分の歩みを考えてみてください。私たちはこの悪者とは違い、私たちの主はすべてのことを支配されているお方であること、すべてをご存じの全知のお方であることをよく知っています。そのことを皆さんは信じています。それなら、私たちの神が私たちのことを見てはおられないと考えて、好き勝手に生きてはいないでしょうか？この神を知ってはいても、その神に対して「私には関係ない」と言っていた悪者のように歩んではいけないでしょうか？今神が見ておられないから、今神が私のことを忘れているから、自分の好きなように行動しようとして…。もし、神が私たちの横におられて私たちのことをずっと見ておられると知っているなら決してしないことを、私たちはしてはいないでしょうか？

詩篇 139 : 1-4 にこのようにあります。「1 【主】よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。2 あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。3 あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。4 ことばが私の舌にのぼる前に、なんと【主】よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。」、これが私たちの知っている神です。私たちの神は私たちが立つのもすわるのも、私たちが發言する前に何を發言するのかそのことも知っておられると。私たちの心のすべて振る舞いのすべてを知っておられる方が私たちの主です。だからこそ、私たちが苦しみもがく時に私たち以上に私たちのことを知ってくださる方に信頼して祈ることができるのです。自分の余りの苦しみ悲しみにことばにすることができなかつたとしても、上手く祈ることができなかつたとしても、神はすべて知っていてくださる、私たちのことを忘れることなく心に留めていてくださると。私たちはそのような約束を真理をいつも喜ぶことができるのです。

しかし同時に、この神が私たちのすべてのことをいつもご覧になっておられるということを覚えていられるなら、それにふさわしい歩みを私たちはしているかどうか、そのことが問われます。どんな状況に置かれたとしても、いつも主にあつて聖さを追い求めながら主にある平安を持つ者として、その証を立てながら歩んでいるのでしょうか？私たちが決して忘れてはいけないこと、それは私たちの主は私たちのことをいつも見ておられるお方だということです。

ここまで、ダビデが理不尽で悪がはびこっている状況の中、主に自分の思い悩みを告白し希望を見出していたその姿を見て来ました。ダビデの思い悩み、葛藤といったものを皆さんも少しは感じるものが

できたのではないのでしょうか？そして感謝なことに、私たちも同じように主に対して自分の素直な思い自分の置かれている状況を、心を開いて打ち明けることができるのです。私たちもダビデと同じような叫びを上げることができるのです。「主よ、どうしてですか？なぜ正しく歩もうとする者が酷い目に会い、自分勝手に生きて神などいないと誇っている者が何の問題も無く過ごしているのですか？主よ、どうか私から遠く離れないで私の思い悩みを聞いてください。」と、ダビデがそのように祈ったように、私たちも同じ主にこのような祈りをささげることができるのです。

ただ、もし、ここで話が終わったとするなら、「私たちは主に告白することができるのです」で終わったなら、私たちはいまだに暗やみの中に取り残されているような感情を受けたかもしれません。希望など見出せないと感じたかもしれません。しかし、ダビデはここで終わってはいません。続けて、残りの12-18節で、ダビデは二つ目の正しい応答を記しています。

2. 王である主に身をゆだねること 12-18節

私たちは主に自分の思いを洗いざらい告白することができるだけでなく、王である主にすべてをゆだね信頼することができる。とダビデは私たちに教えてくれています。では、具体的にそれはどういうことでしょうか？少なくとも、二つのことが言えます。

○具体的にどのように身をゆだねるのか？

1) 主は弱い者を助けてくださるお方だと信頼すること 12-15節

もう一度12-15節を見てください。「:12 【主】よ。立ち上がってください。神よ。御手を上げてください。どうか、貧しい者を、忘れないでください。:13 なぜ、悪者は、神を侮るのでしょうか。彼は心の中で、あなたは追い求めないと言っています。:14 あなたは、見ておられました。害毒と苦痛を。彼らを御手の中に収めるためにじっと見つめておられました。不幸な人は、あなたに身をゆだねます。あなたはみなしごを助ける方でした。:15 悪者と、よこしまな者の腕を折り、その悪を捜し求めて一つも残らぬようにしてください。」

虐げられていた中、悪が横行しその中で苦しみに遭っていた中、「なぜですか？」と叫んでいたダビデは、そこで終わるのではなく主に「立ち上がってください。…御手を上げてください。」と呼びかけました。このことばは「今、行動を起こしてください」と主に助けを求めることばです。「今、主よ、助けてください。どうか今、行動を起こして弱り果てた私たちを助けてください。」とそのようにダビデは求めたのです。

また、ダビデのこの望みは決して不確かなものではありませんでした。悪者たちは「神は自分のことを見ておられない」と口にしていたのです。「神は自分たちのことを忘れている。だから、自分勝手に好きに生きていけば良い、神は見ておられないから…」と、そのように誇り高ぶって歩んでいました。それに対してダビデが言うことは「あなたは見ておられました。…じっと見つめておられました。」と。ダビデは自分自身に思い起こさせるのです。「私の神は決して私のことを見捨てられるお方ではない。貧しい者を見捨てられる方ではない。いろんな人がいろんなことを言って『神は私たちのことなど見ておられない』と言っているけれど、私はこの神が私のことを見ていること、貧しい者弱っている者、力無い者を見て心に留めておられる方だと知っている。」と。だからこそ、たとえどんな状況に置かれていたとしても、この神は自分に身をゆだねる者を必ず守ってくださる方だと信頼したのです。

14節には「みなしごを助ける方」と書かれています。自分の力ではどうすることもできない、何もできない、そんな赤ん坊でさえ主は十分に助けることができるということです。主の力はこのような何もできない赤ん坊さえ敵から守ることができる、それ程偉大なお方だということです。理不尽な扱いを受けて悪者に傷つけられて何の力も残っていないようなそんな弱り果てた者も、この主の御手のうちにあって喜びを持つこと平安を持つことができるのです。この守りのうちに安心することができるのです。

そして、その守りのうちにあっては、どんな困難も苦しみも、自分を責め立てる者たちも決して自分たちに触ることも痛めつけることもできないと言います。だからこそ、たとえ主が私たちに答えを与えてくださらないような、遠く離れていると感じることがあっても、私たちがいつも覚えることができることは「この主はいつも私たちのことを見て心に留めてくださるお方だ」ということです。いつでも、どんな時でも弱い者を助け、虐げられている者に守りを与え、必要な力を与えてくださるお方だということです。ですから、私たちも同じようにこの主に今日信頼することができるのです。この主に信頼しながら希望を持って歩むことができるのです。

2) 主は悪者を必ずさばかれるお方だと信頼すること 16-18節

どのように身をゆだねるのか？その二つ目は「主は悪者を必ずさばかれるお方だと信頼すること」です。16-18節を見ましょう。「:16 【主】は世々限りなく王である。国々は、主の地から滅びうせた。:17 【主】よ。あなたは貧しい者の願いを聞いてくださいました。あなたは彼らの心を強くしてくださいます。耳を傾けて、:18 みなしごと、しいたげられた者をかばってくださいます。地から生まれた人間がもはや、脅かすことができないように。」

今日、私たちが見て来たように、悪者は「神は見ておられない。どれ程好き勝手に生きたとしてもさばかれることは絶対ない」と思って生きていたのです。自分勝手に生きていても何の問題も無いと。でも、聖書が教えることは「この主は必ず正しいさばきをその者に下される」ということです。世々限りなく王である神が、過去も現在も未来もそれらすべてに起こることをご存じであり、そして、それらすべてを支配されている神が、必ず、ご自身の正しさに基づいて悪をさばかれる、その日が必ず来るということです。神を認めない者、神の存在を知っていながらも「私には関係ない、自分の好きなように生きていく」と自分の望むままに生きている、そのような罪人が必ず正しくさばかれる日がやって来るのです。

今、正しい者が虐げられていて私たちが疑問を覚えるようなことがあったとしても、悪が勝ち誇っているように感じるようなことがあったとしても、それはいつまでも続くことではないということです。ですから、もし、この中に、今日詩篇10篇で見て来たように「自分の人生は自分のためだから自分のものだから自分が喜ぶように生きていく」と、自分が人から認められたり、自分の望むものを手に入れることに精一杯になって「神なんて知らない、私にはさばきなんて関係ない」と、そのようにして自分勝手に神を拒絶して歩いていく。そして、さばきなんて自分には下らないと考えている人がおられるなら、よくこの詩篇10篇のメッセージを聞かなければいけません。

また、次のみことばによく耳を傾けてください。ローマ2：4-5「4 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。5ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」、悪者はさばきなど無い、私には関係ないとして歩いてきたのです。「そんなもの…見えないではないか！」…と。皆さん、神が今さばきを下されないのは神に力がないからではありません。神はいつでもこの世の悪をさばくことができる力あるお方です。この世の悪を見逃している訳でもありません。この世の悪をすべて見ておられるお方です。

しかし、また、この神はあわれみ深いお方であって、一人でも多くの者が悔い改めて神に立ち返ることができるようにとそのことを待ち続けてくださっています。神は忍耐をもって待っていてくださるのです。だから、神が忘れているのではありません。神は必ず私たちひとり一人に正しい報いを正しいさばきを下されるお方です。ですから、決して主のさばきを軽んじてはいけません。「私たちには関係ない」と思っていてはいけません。もし、そのあわれみが示されているにも関わらず自分の好き勝手に生きることを望むのであれば、さばきの日にあなたは自分で主の前に御怒りを積み上げているのだとみことばは教えています。必ず、主は正しくさばかれると…。

しかし、もし、これまで自分のやって来たこと、自分の欲のために生き自分の望むままを生き、神ではなく自分のために生きて来たその愚かさを神の前に悔い改めて、その間違っていたことを主に告白してこの主に救いを求めるのであれば、その人を主は愛をもってあわれみをもって恵みをもって救ってくださるというその約束も主は与えてくださっています。ローマ5：8-9には「8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。9ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」、御怒りを積み上げていた私たちに対して、その怒りを主イエス・キリストが、神のひとり子である罪の全くないイエス・キリストがこの地上に来てくださって私たちの代わりに十字架で死んでくださることによって、私たちの受けるべきであった罪のその罰を、神の御怒りを代わりに受けてくださったのです。そして、三日目によみがえって私たちに救いを与えてくださった。ですから、もし、この救い主を今知っておられない方がいるなら、今も自分の好き勝手に生きて自分にはさばきなど有り得ない、関係ないと思っている人がいるなら、必ずその日は来ます。その日が来る前に、ぜひ、このイエス・キリストを自分の救い主と認めてこの方のために歩いてください。

また、今この主イエス・キリストを信じて歩んでいる皆さん、私たちもこの主が成してくださったこの十字架のわざを忘れてはいけません。皆さん、私たちもかつてこの詩篇10篇で示されていた悪者の姿と同じように歩いてきたのです。私たちも自分自身のことをいつも一番に考えて、自分の望むものを手に入れたいと歩んで、神を顧みることなく、救いが目の前に示されているにも関わらず、救いなど要らないと歩いてきたのです。しかし、恵みによって、イエス・キリストが私たちに示されたその救いを信じることによって、私たちは今主にあって喜びをもって歩むことができます。この主にあって、私たちは確かな希望をもって今日歩むことができます。ですから、今、この主に信頼して歩むことです。必ず、この主は正しいさばきを下されます。だから、たとえ、今自分に理解できないことがあったとしても、自分の手には負えないようなことがあったとしても、主に確かな希望があるからこそこの主を覚えて歩いていくことです。

さて、今日はダビデを通して、有りもしないことで虐げられ悪が勝利したかのように感じるそんな時

でさえ、希望を失うことなく歩むために欠かすことのできない二つの応答を見て来ました。皆さん、どうだったでしょう？ 私たちが生きていけば「どうしてこんな理不尽な目に遭わなければいけないのだろうか？なぜ、私だけがこんな酷い目に遭わなければいけないのだろうか？」と、そのようなことは今後も必ず受けます。そのような目に必ず出くわす訳です。でも、そんなときこそ私たちは恐れや不安、文句を言い続けるのではなく、私たちの持っているすべての思いを正直に主に告白して、そして、この主に信頼することを学び、不公平に思えるような中においても、それらすべてに勝る主にある確かな希望を持って歩んでいくことができるのです。このイエス・キリストのうちにこそ私たちには希望があるのです。

私たちクリスチャンに与えられた責任、それは、この主を覚えていつも誠実に歩んでいくことです。クリスチャンが誠実に歩むためには、喜びや平安を持って歩んでいくためには、状況が変わる必要はないのです。なぜなら、私たちが今日、詩篇 10 篇で見たように、ダビデが置かれている状況は少しも変わってはいませんでした。彼は苦しみの中に居続けた訳です。彼は考えられないような理不尽な中に今もいた訳です。しかし、彼はその中においても希望を持って歩むことができました。

この同じ希望が今日、私たちにも与えられています。ですから、ともに、どんな時でもこの主を覚えて希望を持って歩んでいく者として成長していきましょう。